

『外地巡礼：「越境的」日本語文学論』

西成彦*著、みすず書房、2018年

三 須 祐 介†

本書は、「外地」における「日本語文学」についての論考がまとめられたものであり、第70回読売文学賞（2019年）の「随筆・紀行」部門を受賞している。学術的な価値を十分に備えながら、良質な文学紀行にもなっているのである¹。

「外地」とは「国外の地。特に、日本の本土に対し、日本が植民地として支配していた朝鮮・台湾・満州などの旧領地」（『明鏡国語辞典』第2版）である。著者じしん「死語のようなもの」（8頁）と言うように、「外地」は確かに既に歴史化された語彙の印象がある。しかし、著者は、そのような「外地」における「日本語文学」の多層的な声を、「帝国日本」の残響として拾い上げ、そこに「日本文学」という枠組みでは到達できないであろうオルタナティブな文学の可能性に、耳をそばだてているのである。というのは、本書には「語圏文学」の周縁への意識が貫かれており、そのような意味においても、「文字を読む」というより「声を聴く」という著者の姿が髣髴とされるからである。

本書は5部構成となっており、内容は以下の通りである。Ⅰは「日本語文学の拡散、収縮、離散」、Ⅱは「脱植民地化の文学と言語戦争」「元日本兵の帰郷」「先住民文学の始まり：『コシャマイン記』の評価について」、Ⅲは「台湾文学のダイバーシティ：2016年7-10月の日録より」、Ⅳは「暴れるテラピアの筋肉に触れる」、「島尾敏雄のポーランド」、「女たちのへどもど」、「後藤明生の〈朝鮮〉」、Ⅴは「外地巡礼：外地日本語文学の諸問題」、「ブラジル日本語文学のゆくえ」、「外地の日本語文学：ブラジルの日本語文学拠点を視野に入れて」。

Ⅰの「日本語文学の拡散、収縮、離散」は本書の総論と位置付けてよい講演記録であり、先住民としてのアイヌ、帝国日本の大陸や南方への進出と現地住民との接触、北米・南米・満洲国といった海外移住地、敗戦と引揚げ、沖縄、北米や南米の日系社会、在日といった射程の広い問題意識にまず圧倒される。帝国日本のなりゆきと並行するように、「日本語文学」が外地を得ることで拡散し、また外地を失うことで収縮、離散していくという見取り図が示される。『東アジア文学史』の一部をなす『日本語文学』なるものの輪郭を描く」（31頁）という著者の構想は、この後に続く各論へと繋がっていく。

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科教授

† 立命館大学文学部教授
sanxu@fc.ritsumei.ac.jp

¹ なお、管見の限り既に二篇の書評が出ていることも付記しておく（日比，2018；大東，2018）。

Ⅱの「脱植民地化の文学と言語戦争」では、被植民者にとって知の獲得やあるいはそれに基づく(帝国への)抵抗意識の醸成にも二律背反的に必要な「帝国」の言語が、脱植民地化の過程でどう扱われるのか、という点について、とりわけ戦後の台湾は、朝鮮半島における「帝国」の言語の単純な排除に終わらず、被植民者であった台湾の人々の言語が再度マイノリティの立場に追いやられるという複雑な状況を丁寧に論じるとともに、ポストコロニアルな状況下における文学の言語の選択の問題、たとえば台湾諸語へのベクトルは「本土化」の可能性を深め、「リング・フランカ」としての北京官話へのベクトルは、世界の華人ネットワークと繋がる可能性を秘めていると論じる。「元日本兵の帰郷」では、帝国日本における被植民者(非内地人)のディアスポラの問題に光を当てる。著者は、南方出征を強いられた台湾や沖縄の青年の「戦後」が描かれた文学のなかに、マジョリティの日本人ではない青年の自己認識を拾い上げ、「帝国日本」の残響としての文学の可能性を見出している。「先住民文学の始まり」は、植民地文学、特に先住民の文学の類型化について北海道(アイヌ)と台湾とを対照しながら論じたうえで、内地人による先住民なりすましの文学である鶴田知也の『コシャミン記』についてその擬装を糾弾するのではなく、先住民への暴力性を批判する点や、アイヌ系の日本語文学の端緒としての貢献をむしろ評価している。

Ⅲの「台湾文学のダイバーシティ」には「日録」とあるが、じつは、Ⅲこそが、本書の核になっているといえるだろう。ここには、著者のフェイスブック(「複数の胸騒ぎ:Uneasinesses in Plural」)における連載記事から、「広義の『台湾文学』に関連するもの」(301頁)が集められており、研究者や作家、研究や作品との縁を起点に、著者の思考が縦横無尽に拡散していく、実験場のような趣を湛えている。たとえば、原住民作家であるシャマン・ラボガンの海や魚群の描写から、「海洋文学」という問いを発し、話は『白鯨』のメルヴィルや、カリブ海出身の詩人であるデレク・ウォルコット、そして石牟礼道子の『苦海浄土』へと移っていく。まるで海洋地図を記憶している鳥が上空から海を見下ろし、興味に応じて目標を定め、軽快に魚に近づき捕獲していくかのようだ。俯瞰と凝視をリズムカルに繰り返しながら、未発の研究可能性が徐々に立ち上がってくるような文章を読んでいると、新しい知の経験をしているような感覚になる。日録に具体的な日付がなく曜日だけなのも、思考や思索はリニア(線的)に進むのではなく、循環したりらせん状になったりするものだ、ということを感じさせてくれる。取り上げられる文学作品も、原住民から、セクシュアル・マイノリティまで、台湾文学のなかでもマージナルなパートに重点が置かれているようだが、なにより、温又柔やリービ英雄という、日本語文学と台湾文学の境界上の存在に注目している点は非常に興味深い。比較文学の射程の広さがなせる業なのかもしれない。評者もここから、多くの知のヒントを得ることができた。なお、本書のカバー写真は、台北の「二二八記念館」であるが、この場所の重層性は、台湾文学のポリフォニックな声にもつながっているように思える。この建物が位置するのは、かつて日本統治時代に「新公園」と呼ばれた憩いの場であり、建物自体は旧NHK台北支局である。「帝国日本」が残響するこの場所は、戦後、二二八事件で重要な役割を果たしただけでなく、白先勇の小説にも描写されるようなゲイの出会いの場ともなった。まさに「台湾文学のダイバーシティ」を象徴するような場所なのである。

Ⅳの「暴れるセラピアの筋肉に触れる」は、帝国日本の拡張による新たな移動の可能性とその犠牲の寓意としてのアフリカマイマイから語り起こし、目取真俊の文学作品における沖縄の戦中戦後を論じている。「島尾敏雄のポーランド」は、戦争経験を契機とした〈ポーランド人性〉を結節点として、植民地主義の残滓のような男女の恋愛を、島尾の作品に見出している。決して「外地」とは

言えないポーランドであるが、ポーランドを鏡のようにして島尾じしんの「帝国日本」の記憶が明滅しているのである。「後藤明生の〈朝鮮〉」も、戦後における後藤の作品が、「帝国日本」の外地（故郷）の記憶を追体験していることを論じている。前者は地理的な、後者は時間的な逸脱と変形をしながら産み出される「外地の日本語文学」の可能性を論じているのである。さらに、テレサ・ハッキョン・チャの『ディクテ』における発話以前の女たちの声をアーカイブする試みを例に挙げた「女たちのへどもど」も、「外地の日本語文学」の表現形式における逸脱性や可変性を、著者が戦略的に語ろうとしているように読める。

Vにおける三篇の論考は、上述した各論を経た上で「外地日本語文学」とはなにかを定義しつつ、とくにブラジルにおける「コロニア文学」を例に、「外地日本語文学」の今後の可能性を視野に入れた内容となっている。そこには「日本文学」という枠組みのなかでは決して生まれようのないオルタナティブな文学創作の現場があり、「日本語文学」の可能性がある。著者は、「外地日本語文学」を「日本語使用者が非日本語との不断の接触・隣接関係を生きるなかから成立した文学」と定義する。また、日本語が作家にとって「母語もしくは母国語であろうと、上から押しつけられた『国家語』にすぎなかろうと」かまわず、「外地経験を背景にもつ」（264頁）人物が登場するだけでよいとする。上述した各論をあらためて持ち出すまでもなく、著者の「語圏文学」への意識とその境界や周縁への関心は本書の通奏低音となっているといえるだろう。

ところで「巡礼」というと聖地や霊場といった場をめぐる恩寵に預かろうとする宗教的行為を想像してしまう。しかし、それは決して過去の遺構を経めぐっているだけではない。「外地日本語文学」の先人の足跡（＝過去）をなぞり、それと対話しながら、現在と未来を見つめること。比較文学の森を軽快に闊歩するような語り口の背後には、この声にならない切実な叫びが内包されているような気がしてならないのである。

参考文献

- 日比嘉高（2018）「日本語文学の可能性のなかへ、外地を解き放つ」『週刊読書人』3231号、2018年3月16日。
大東和重（2018）「『越境』文学生んだ移動の航跡」『日本経済新聞』2018年3月17日。